

教育課程の編成方針

■ 学士課程

美術工芸学部の教育目標で求められる学修成果を修めるために、下記の事項を踏まえて、学生が段階的に学べるよう、体系的に教育課程を編成する。

1. 学部教育の4年間の前期において語学、体育を含む一般教育を中心に履修し、その基盤の上に専門基礎科目を履修する。高学年になるに従い専攻科目などの専門科目の割合が増えるような科目編成とし、一般教育科目と専門科目の連携をめざしながら体系性を保持し学習効果の保証を図る。
2. 専門教育科目の基礎科目においては、自専攻・科以外の分野を選択履修し、さまざまな技法や素材に触れ、多様なメディアを用いた表現や複合的な表現が可能となる科目編成とする。
3. 専門教育科目の専攻科目については、各科・専攻のコアとなる科目を体系的に編成することにより順次性をもって学習し、4年間の成果の集大成として卒業制作・論文を課す。

【美術科日本画専攻】

日本画（一）Ⅰ・Ⅱ、（二）Ⅰは日本画制作の基礎となる観察力や描写力、表現力を育み、日本画材の扱い方からはじめ伝統技法や技術を学び、絵画造形美術の諸要素やその文化についての知識を修得します。日本画（二）Ⅱ、（三）Ⅰ・Ⅱの前半では大作を含む課題制作を通して自己表現を模索・考察すると共に、主題に応じた画面構成や表現方法など創造の視野を広める指導を個別に行います。日本画（三）Ⅰ・Ⅱの後半から日本画（四）Ⅰ・Ⅱでは表現や理論の独自性、日本画（四）Ⅱ前半の後半においては以上の集大成として卒業制作を行います。これらの演習では外来の講師を招聘するなどして専門性の高度化と評価の客観性を充実します。

【美術科油画専攻】

1年次、2年次を基礎的課程として捉え、専攻科目の油絵（一）Ⅰ・Ⅱ、（二）Ⅰ・Ⅱを通して、描写力や造形美術における基本的理念を学び、絵画等に関する知識と技能を修得します。3年次からは研究室による個別指導を行い、創作の表現力、構想力を伸長し、油絵（三）Ⅰ・Ⅱの成果として進級制作を行います。4年次には作品の独創性、現代性に留意し、油絵（四）Ⅰでは前期制作、油絵（四）Ⅱでは4年間の集大成として卒業制作を行います。実技の評価は合評会形式で行い、自己のプレゼンテーション能力を養うとともに、外来の講師を招へいするなど客観的な評価を目指します。

【美術科彫刻専攻】

1年次、2年次は基礎的課程として、彫刻を中心とした現代芸術の基本的知識の学修および実習を通して制作技術を修得することを目的とします。その目的のもとで専攻科目の彫刻（一）I・II、彫刻（二）I・IIでは、作品制作の基礎的な構想力と造形力を学びます。3年次の彫刻（三）I・IIでは表現手段や扱う素材を選択し、主・副指導教員を中心とした指導のもと、より専門性の高い作品制作を行います。4年次の彫刻（四）I・IIは全課程の集大成として独創性、現代性に留意しながら、卒業制作（前期・後期各1課題）に取り組みます。作品プレゼンテーション能力の向上を目指し、実習ごとに合評会形式の講評、評価を行います。彫刻論の授業や合評会では様々な分野で活躍している講師を招聘し、多様な指導を行います。発表活動を奨励し、将来幅広く芸術分野で活躍できる人材を育成します。

【美術科芸術学専攻】

基礎的課程としての1年次と2年次では主に、日本・東洋・西洋の美術史、美学や工芸史などの講義、絵画、彫刻、工芸などの技法演習を通して、美術の歴史と現状を理論と実技の両面から探求するための基礎を学びます。また1年次から3年次の芸術学演習（一）、（二）、（三）を中心に研究方法を学び、特に3年次には各種の専門語学科目とともに学生個々が芸術のさまざまな領域から研究対象とする分野を選択して、専門的な研究を展開できる能力を養います。そして4年次の芸術学演習（四）では4年間の集大成として学術研究を行い、その成果である卒業論文を執筆します。なお、各演習ではレポートや論文の執筆のほか、常に口頭発表を課し、研究成果を社会と地域に還元して国際的に貢献する能力と意欲を育みます。

【デザイン科ホリスティックデザイン専攻】

1年次では、描出、形態、色彩、発想、素材、情報といった演習を中心に、デザインに共通する基礎力を修得します。2年次では、1年次での学びを基盤として、より専門的な技能を横断的に学び、自分の進む道を主体的に選択できる判断力を修得します。3年次では、実践をとまなう応用的な演習に加え、社会で活躍するために必要な視点と、総合的な企画力を修得します。4年次では、担当教員の指導のもと、自身のテーマに向き合い、いままでに学んだ経験を集約して、卒業制作に昇華します。

【デザイン科インダストリアルデザイン専攻】

1年次では基礎課題を通して表現力、アイデア発想力を育み、様々な素材の特性と加工技術を学びながら基礎造形力を身につけます。2年次には機能、コンセプト、プロトタイプング、製造法などの切り口からプロダクトデザインの演習を行います。3年次には、調査・分析・企画・試作・検証まで一貫したプロセスを通してインダストリアルデザインの手法を体得するとともに、産学連携などにより実務能力を高め社会性を身につけます。4年次には社

会課題や公共性をテーマとした演習を行い、これまでの専門演習を結集して卒業制作に取り組みます。実技においては、専門性の高い外部講師を含めた複数の教員が指導にあたり、評価も複数の教員で総合的に行い客観性を高めています。

【工芸科】

工芸科の1年次には基礎的な造形力・デザイン力の習得と工芸演習（一）や材料学演習を通して4分野の素材（陶磁、漆・木工、金属、染織）に係わる特性・技術を学びます。2年次には専門コースに分かれ、道具作り、伝統技法に基づいた専門基礎技術を学びます。3年次には工芸演習（三）の課題に応じて発想力、造形力、表現力を養うとともに、複合素材演習や、工芸企画演習などの授業を通して適切に自己をアピールできるプレゼンテーション能力を高めます。また地域工芸演習Ⅰ（インターンシップ）・Ⅱ（産地研修）の授業を通し、工芸と社会の係わりを考え、これらの体験を基に自己の制作を高める手法を学びます。4年次には豊かな感性、社会性を支える広い知識と教養を身につけ、卒業制作に取り組みます。各コース内の研究会、工芸科全教員による講評会を行い、合同評価を経て、将来社会で活躍できる人材を育成します。

■ 修士課程

修士課程においては、美術、工芸、デザインに関する高度で自立した創作・研究活動を可能にするため、学生の個性に基づいた「多様化」を尊重し、表現の「自由化」と「言語化」及び教育の「高度化」を推進し、地域と国際社会における「社会化」を実践する能力の育成を教育の指針にしています。

教育課程においては、これらの教育の指針や各専攻の教育目標を具体化した演習、講義科目をコースワークとリサーチワークとして編成し、選択・必修科目として、各専攻・コースの専門性に沿って科目の配置を行い、『研究指導計画書』に基づいて指導を行っています。研究の集大成として修士作品又は修士論文を課し、研究成果の審査を行います。

【絵画専攻日本画コース】

日本画を中心とした芸術における専門的かつ幅広い見識と理論的知識を「絵画論特論」での各教員個別の講義の中で深化し、「絵画技法演習」では伝統的表現方法の研究を踏まえながら自由に独自の表現を追求します。「日本画制作（一）（二）」において、各自の研究を追究するとともに各種展覧会への出品等の研究発表をも活発に行うことで、高い創造性と独創性を有する作家としての自立を目指します。そして修了制作においてそれらの研究成果を集約します。

【絵画専攻油画コース】

「油画制作（一）」および「油画制作（二）」において、高度な表現技術を伴う研究制作を

実現するために、古典から現代に至る国内外の作品を分析するとともに、「絵画技法演習」において油彩画の組成や絵画技法上の応用展開としての版表現の技法を考察します。また、「絵画論特論」では各教員独自の美術論を学びながら専門的な広い見識を深め、プレゼンテーションワークや制作論を通して制作に客観的な視点を加えます。集中的かつ緻密な合評指導を経て、集約された研究の成果として進級制作（1年次）、前期制作（2年次）、修了制作（2年次）を行います。

【彫刻専攻】

「彫刻」および「環境彫刻」両コースとも、それぞれのテーマに準じて、基本となる表現素材の選択のもと、表現方法と現代芸術とのかかわりを考察して各自の造形理論を深め、高度な研究制作活動の展開を図ります。「彫刻特論」では彫刻を中心に20世紀以降の造形芸術に対して考察を加え、各自の造形観を理論面から構築します。また、国内外で幅広く活躍中の先進的な作家を招聘し、多様化する現代美術に即応する演習を行います。

【芸術学専攻】

学部の教育方針を基盤とし、美学、日本美術史、東洋美術史、西洋美術史、工芸史の5つの専門分野において学術的により高度な研究を行うことを目標とします。自ら問題を設定し、実作品に即しながら多様な文献資料を用いて研究を進めることを重視します。分野を横断し、総合的・学際的に研究するための「芸術学特論」、美術大学という環境を生かし、素材や技法についての専門的な知識を深める「美術技法研究」を専攻必修科目としています。広い視野を持ちながら、緻密な論理に基づく研究を探求します。

【デザイン専攻視覚デザインコース】

「視覚デザイン演習（一）および（二）」において高い専門性を備えたコミュニケーション・デザインの具現化を目指します。個々の学生の持つテーマに沿った研究と制作を歴史や事象を踏まえ、「視覚伝達論演習Ⅰ～Ⅴ」ではさらに個々の専門性を深めつつ、メディアを駆使して実践します。また産学連携、地域連携などの事業を通して社会とのリアルな繋がりからディレクション能力を強化するとともに、社会の問題と向き合ったテーマを高い客観性を持つ表現として修了制作に昇華させます。

【デザイン専攻製品デザインコース】

学部で習得した製品デザインの基礎的、総合的な知識と技術の先にある、より専門性の高いデザイン領域に向い合う授業科目としてⅠ～Ⅴの各製品計画論演習を配置しています。そして、各特論と製品デザイン演習Ⅰ、製品デザイン演習Ⅱにおいてデザイナーとしての主体性や計画性、論理性や表現力を錬磨し、各自の目指す領域におけるプロフェッショナルとして求められる力を体得します。それらの集大成として修了制作を位置づけています。専門

領域におけるマンツーマンの指導と、各専門領域を包括するディスカッションの場を定期的に設けています。

【デザイン専攻環境デザインコース】

学部教育における造形基礎を含め、専門的な制作と研究をもとに、自己研鑽を原動力として研究と制作に打込める体制を取っています。特にディレクション能力の強化を柱に学部から修士までの6年間を一貫教育として捉えています。さらに各自の研究テーマをより深化することを目的に論理的なアプローチを支援する科目も整えています。また並行して社会的なプロジェクトや課外活動を積極的に取り入れて、制作の視野を広げる取組みを奨励し、これに関連付けて研究・制作に活かすよう指導しています。これらを組合わせて、学生個々の独自性を重視することにより社会への新たな意義を提言することに繋がります。

【工芸専攻】

学部での研究制作を基礎とし、各専門領域におけるより高度な研究制作を行います。「工芸演習（一）（二）」「技法演習」では自ら研究テーマを設定し、表現・技法・理論的考察を柱に研究制作を進めます。同時に工芸と文化について幅広い視野を得るために、学外から積極的に講師を招き「工芸特論」と「地域文化論」を専攻必修科目としています。また定期的に工芸科全教員による研究会を設け、学生と教員が相互にディスカッションを行うことにより研究内容をより豊かなものへと導きます。多様化する社会の要求に対応しつつ、常に時代を切り拓く創造的な表現を追求します。

■博士後期課程

博士後期課程の教育課程には、コースワークとして全領域必修科目である「地域美術演習」、「造形総合研究」及び各領域の選択科目の「研究制作」又は「研究演習」が置かれ、各領域・分野等における総合的、専門的な研究を行っています。さらに、リサーチワークとして全学年必修である「研究領域研究指導」において理論面から論文作成指導を行います。自立して高度な創作・研究活動を可能にするための指導を『研究指導計画書』に基づき実技と理論の両面から受けるほか、1・2年次生は年に2回、研究成果を発表する共同発表会を学生の自律的な運営により開催し、3年次生は論文等審査期間中に、実技系においては研究作品展示を、理論系においては口頭による研究発表を行います。